

吉田神道教学の覚書（未完）

安  
津  
素  
彦

# 吉田神道教学の覚書（未完）

安 津 素 彦

- 一、はじめに
- 一、学派神道とは
- 一、学派神道の起源
- 一、他の神道との違ひ
- 一、学派神道の諸流
- 一、維新以後の学派神道
- 一、吉田神道の教典
- 一、『神道大意』のこと
- 一、慈遍について
- 一、慈遍の『神道大意』
- 一、をはりに（未完）

## 一、はじめに

本稿は吉田神道の教学についての一つの考察といつて宜しい。吉田神道教学関係の研究は多くの研究者の努力で解明されてをすることは申すまでもない。改めて今日起稿することは屋上屋を架する類で、意味もなく摸倣か、他人の業績の上塗りにすぎぬとの評もあらう。果して然るか。筆者自身も過る年、未熟な一文を草したこともある。その折りは精一杯に努めたものの、省みると恥しい次第である。

本稿も後日読み返すと、旧稿と同様の苦汁を飲む想ひに浸るやうなものとならう。抑々論文を書く目的は何か、自分のために書くのか、公表し他者の批判をうけることが第一義なのか。鶏と卵との論義に似て、何れでもあるし、何れでもないとの曖昧な答へしか期待しかなないが、何れかの二者択一を迫られるとすれば、筆者自身の納得が先づ求められねばなるまい。

論文自体の長短二点を承知の上で、執稿することが前提であらう。自然科学系統の論文は別として、文化科学のそれは、それなりの完成度は高くとも、纏まった段階で優れた論であつても、何れかの点で筆者か第三者の何れかの入により後日の修正加筆のあつて然るべき未完成のものではなからうか。

論文（著書をも含めて）は、何時も未完成品である、とは筆者の哲学である。論文執筆の第一義は自己の研究心を納得せしめることにある。これも筆者の哲学である。関心が湧くごとに執筆し起稿して然るべし。これ筆者の哲学であつて、本稿を草する動機でもある。

扱て吉田神道教学の論述にあたって、少々長々しい前文を書きすぎたやうだ。これも現在の筆者の心境の要求に応じてものした点を広く御諒承願ひたい、とお断りしておく。

## 一、学派神道とは

吉田神道は、神道史の分類からみると、第一期原初神道時代、第二期神仏習合関係時代に次ぐ、第三期時代に該当する学派神道時代に算へられる一学派の学説、教学と申してよい。神社神道・教派神道・皇室神道・民間信仰等のさまざまな分類される諸々の神道と、学派神道とを比較してみると、次の点で、他の神道から一線が画される。その特色は左の点と云へる。

我国には、そもその自然人の生きる上での必須の基本条件としての自然の風土と、この風土に居住する人々との間の相乗的生活の繰返しの中に、自づと一つの信仰が生れた。自然時間の経過と文化時間とが相俟って、この信仰は種々相々を呈しつつ何時しか根雪となつて日本文化の根底に今日までしかと核として存しつづけてきた。学派神道の原則としての狙ひは、この日本に生え抜きの信仰の理論的な体系化にある。とは云つても、その業績は今日の所謂客観的に純理論的なものにせられたものではない。学問の性格は古今東西不変でも不易でもない。ギリシャ哲学以降の西欧学問史を一見すれば判明する。説明の要はない。異文化史上の学問、或る特定の時代・地域に生れ育つたものを規準として、普遍原理として学の性格を論ずることは不見識である。参考に止めておくべきだ。

学派神道学の過去の業績を、今日の神道研究の立場からみると、神道思想、神道教学の面が前面に泌み出てゐる。学派神道自体の成立のそもそものは、神道者の自覚に始まる。学問とはシナ学である。舶載の学問の研究に、学の目的は尽きるのだ、との考へは奈良時代以降、平安時代に至る男性学者の通念・常識とみて宜しからう。漢語を読み、漢文で文章を綴る、これが学者としての面目である、と確信してゐた時代は永く続く。

「はかなくも思ひけるかな乳(智)もなくて博士の家の乳母せん」と。「さもあらばあれやまと心しかしくば細

ちにつけてあらずばかりぞ」。それぞれは学問の家柄の大江匡衡と栄花物語の作者に擬せられてゐる赤染衛門の歌である。へ乳母せんとてまできたりける女の、乳の細く侍りければ」との理由でへよみ侍」つた匡衡のものは、改めて説明には及ぶまい。乳母としてきたのに、乳の出の悪いとは不都合千万である、博士の家、学者の家に、智（識）の浅い女性がくるとは情けない。妾はシナ字には仰せの通り疎い不束者です。しかし、大和心の点が確としてをれば、漢才に欠けてをっても、赤子を立派に育てることは出来ますよ、と応答してゐる。

大和言葉は女性の意気込みで生きつつける。言葉の伝承はそのまま思想の伝承でもある。

## 一、学派神道の起源は

学派神道の先鞭は外官神道にある。遅くみても文献的には平安時代の初期にまで遡れる。延暦儀式帳がそれで、共に延暦二十三年（八〇四）の撰進である。奈良時代から記録され出した青丹よし奈良の大寺の縁起書に触発せられて、以降神社版縁起書が少しづつ纏まり始まる。儀式帳は書名にみられるやうに、神宮の儀式に関する書物ではあるが、内容は今日儀式の文字から理解されるやうな狭義のものに止まらない。年中の神祭行事の記載は当然の事柄として、先づ頭書には神宮の御鎮座の起源から筆をおこす。そこに当然の結果、無意識に記録された神宮の自己主張が読みとれる。この点数学の萌芽が儀式帳から窺知される。仍つて外官神道（数学の起源を儀式帳に求めた次第である）。

学派神道は人為の所産である。何んとなれば、学派神道は、特定個人或は特定複数者が、兎に角、神道に関心を懷いて、神道の核を究明しようとする智的且意識しての所産であるからである。成立の主体は特定者の側にある。そこで人為とみる。神社神道、又は民間信仰等は、特定者の手によって発生したものではない。この点は自然的所産の神道として、人為の神道である学派神道と一線を画してゐる。

## 一、他の神道との一つの違ひ

教派神道は、では人爲か自然か。何れであらうか。人爲か自然かの二者択一を追られると、人爲でもあり、自然でもあると極めて曖昧な返事が戻りそうだ。何故か。一般宗教の起源と同様に、教派神道には教祖が居る、開教者と呼ばれる篤信者が先づゐる。篤信者には積極的に求道に身を挺した人と、反対に超絶者から篤信者なるが故に択ばれて教祖の地位に据ゑられた人とに分けられる、とすると教派神道の場合、教祖は不可欠の要素ではあつても、一般論として人爲宗教或は自然發生の宗教とも断定することは実態を無視した輕々の所論と却けられる。事実に則して何れにでも分類せられるのが教派神道であるかに思はれる。

学派神道では、神道究明への自覚ある知的努力が、先づ要請され先行する。必要条件となる。教派神道の場合は違ふ。成立に際しては教祖は受身である。無自覚で主体性はない。あつてはならぬ。神からの呼び掛けに素直・率直に応へる側に立つ例が多い。超絶者の深秘な意のままに随順する。神の召命は至上命法として受ける。茲に教祖は仲持者・媒介者として、その存在は絶対に不可欠ではあるものの、この場合の教祖は神の召命を受けるに止まる。教祖側に受けようとの主体的意欲があつた訳ではない。そこで考へ方の如何によつて、教派神道は自然的とも人爲的とも判別されることにならうか。

皇室神道は、人爲的か自然的か。

起源は遙かに高天原に求められる。邇邇芸命の天降りにあたり、天照大御神は三種の神器中の八咫鏡について皇孫に「此の鏡は専ら我が御魂と爲て、吾が前を拝くが如くいつき奉れ」と勅を下される。ここに皇室祭祀は由來する。

新帝御即位の踐祚大祭祭は皇室祭祀中の中枢として皇室神道第一等の祭祀に算へられる。天皇位につかれる儀であ

るからに他ならない。他の祭祀は何れも天皇としての奉祀の儀である。上記の起源からみて、皇室神道は天照大御神の神意に端を発した以上、自然発生のそれではあるまい。

以上で概略各神道の性格の一部に言及した。

## 一、学派神道の諸流

扱て学派神道に入る。学派神道は内容上、複数である。単純ではない。幾通りに分類される。外宮神道・吉田神道などと幾流かに分類・区別される。理由は、教説の内容に相違がみられるからに他ならない。教説の内容の相違の由来は、(一)には選択する原典とその扱い方に基づく。(二)には原典を扱い理解し解釈を下す人自身の生活乃至は人柄なりが理解・解釈に反映して差が生ずると考へられる。

(一)に就いて考察する。学派神道の場合、神道の本質・核を究めることを目標としてゐる以上、大前提として記紀等の古典を第一義の文献とみなす理由の点は説明の要はあるまい。最低条件として記紀等の古典に依拠するとしても、結果からみて、古典の記事の或る部分の抜き書や、神名の羅列に止まってをては、学派神道教学の業績とは到底みなし難い。資料を拉してきて、その資料の語つてゐる内容・意味を神道的に説き明らかに、読む人、聴く人をして納得せしめるやうな知的努力が論述の中に払はれてをらねば教学としての意味はない。

学派神道をみるに、単に神道古典のみを文献資料として活用してゐる学派ばかりではない。仏典や経学の書は勿論のこと、シナの民間信仰関係の書に至るまでも参考とし補助として教学の樹立に努めた学派も多い。儒学神道・神仏習合の仏教系神道、又は神儒仏一致の神道などはそれである。

(二)の点は人に在る。同一系の学派内では各人にとって、学派の最大共通項の遵守は当然である。復古神道学派は、

古典を中心、古典を尊重するとの建前をとる。これ共通項。古典中、何れの古典を第一等とみるかは学者によって差がある。荷田春満は日本書紀を重要視する。賀茂真淵は意図として古道の探求はあるも、業績としてみると、万葉集・祝詞等に力点が置かれた。古事記を重視したのは本居宣長で、平田篤胤になると先人とは古典観が一変する。眞実の古伝は式の祝詞に秘むとみて、祝詞を枢軸に据え、記紀の分析・解釈を試み、古伝の再構成を意欲的に試み、注釈を敢行した。古史・古史成分・古史伝が一聯の著書である。学説に各人各様の模様を織るものの、各人にとっては神道教学の成果である。他学派はいはずもなである。

## 一、維新以後の学派神道

明治新政府は新時代に適応し対処する必要上、教育機関を創設し、整備する。最高機関として開成学校と医学校が発足、明治拾年両校は合併され大学校と称す。直て帝国大学・東京帝国大学と改称され現在の東京大学となるが、講義内容は泰西一辺倒で反省はない。和魂洋才は掛声にのみ止まる。平安時代の学問が漢才の漢学随順であるなら、明治初期以降の我学界は、近代科学即学問観に振り廻はされてゐる。無反省に信奉した憾みがある。

学派神道は、特に復古神道学派は、大勢上、維新以降衰退の傾向をたどる。初期の賑々しい門出にも不拘、官制上の後退に象徴されるやうに学派としては、次第に学問の領域から外れて神社界へと転出する。大勢に抗し得なかったのは自力の不足或は学問の志向性の硬直化にも原因は在る、と筆者は反省したい。時勢に弱体化の真因を転化せしめては、真因を探る眼力を覆う結果ともなりかねない。素直に客観的にこの点の追求に努め、神道学のより正しい発展に精力を注ぐことが我々に課せられた責務ではなからうか。

明治二十三年、井上哲次郎が「比較宗教」の名の許に東京大学で初めて講義。三十八年に「宗教学」の講座が創設



され今日に至る。宗教学の紹介は神社神道界に格別の動搖を齎らした。世界宗教とか民族宗教とかの分類、唯一宗教とか多神教とかの宗教の區別に特に衡撃をうけた。宗教学自体の未熟のせい、或は、宗教学はキリスト教世界に生れた学問であるからして、との理由から、学としての建前から客観的実証主義を研究方法と標榜しつつも結果としては、当時の宗教学はキリスト教に規準を合せての理論構成が骨となったものである。かかる宗教学が学問の名において普及させられるや、結果としては、日本民族間にのみ信奉されてをり且つ多神教としての神社神道は、学といふ虚名の權威の許で、ヨーロッパの信仰よりは一段と低い宗教との烙印が押されることとなる。この点、神社界は動搖し卑下し、且つ自信喪失気味となる。神社は民族信仰です、と説明する神社界側の声には、何か手頼りない響きを感じる想ひに衡撃をうけたことを筆者は何度も経験してゐる。多少以上の点につき解釈を下さう。

宗教学は、オランダのライデン大学C・ヤ・ティーレ教授とイギリスのM・ミューラー教授との手になつた新しい学である。宗教史学史によると、当初宗教進化論なる学説がフランスの社会学者A・コント（一七九八—一八五七年）によつて体系化をみる。宗教の展開を呪物崇拜↓多神教↓一神教と系列化し、加ふるにこの展開を価値的評価し、発展とみる。宗教は先づ抑々の原初の段階では呪物崇拜である。人工物に簡単に加工した自然物を対象として信仰し儀礼を行ふ段階を指す。次の段階に至ると、対象物は多神となり、遂に一神のみを信仰対象と仰ぐ最高段階に達する、とみなす学問が組織された。

同時に布教の地域の違ひに基づき、世界宗教と民族宗教との二に分け、価値的評価が加はつて実証主義としての宗教学から逸脱した一つの宗教哲学の見解が茲に示される。彼れ此れが相俟つて、神社神道は多神教且つ現在のところでは神社は概略して日本民族の間に信仰は止まつてゐる実情から、仏教・キ教・回教等の複数の民族或は国家で信奉される宗教に比し、一段と劣るとか発展途上の宗教であると心得てをる人は今日ですら一部には居る。

世界宗教といはれてゐる宗教の実体は一体か何か。仏教にしても基督教にしても、それらの本質・核が各時代・各地方に祖型のまま喪失されず変質もみずに伝播・布教され、それぞれの土地に根付いてゐるのであらうか。根付いた信仰は、布教者が布教しようとした信仰の本質・核とは形式上の相似はとも角として、文化風土の力で違つたものと育つてゐないのか。どの点がどのやうに変質して布教地（信奉者に根付き育つたか。以上の点を吟味せず無視した論は、内容上からみて、左程意義はないものである。

身辺の農作物・植物を例に挙げてみる。種子を播き、苗を植ゑると芽は出て支障のない限り果実もとれやう。但し大地の条件、氣候土質の制約の許に芽を出し、果実はつく。種子・苗の採れた原産地とあらゆる点からみて同一条件下で育成されない限り、似て非なる果実となる。

宗教の布教・宣布もその結果はほぼ類似とみて大過はあるまい。自然の大地は布教する地方乃至国家の文化の風土に替る。猶、布教者は兎も角として、信者は布教者と異なる文化風土に生をうけ教養を身に付けた人格を具備した人間であつて、内容の空虚なロボットではない。伝統文化の稀薄な民族であれば、或は空虚に近い国民であれば、或はキリスト教伝道の常套方便手段とみられる医療設備・教育機関等の文化施設を併用しての伝道手段を構ずれば、相当の効果の挙がることはあらう。相手が文化風土に浴してゐる民族であるとならば、農作物にみられるに似た結果が現れるのではあるまいか。尤も文化の移植と農作物の移植とを全く同一事とみなすことには細心の注意・考慮は払はねばならぬものの。

三十八年前の占領軍の最高主脳部のマ元帥が、我国への政策・施策に対して最大の熱意を注いだのはキリスト教の宣布であつたといはれてゐる。彼は一種の使命感を懷いて非キリスト教国への福音の施しに情熱を傾け、宣教師の渡来を重点的に奨励したそうだ。莫大な金品をも費して、キリスト教国に我国を化し、精神上の不毛の地（日本）に正

しい信仰の種を蒔き育てて、日本人の精神の正常化に努めたことは、多くの文献が語ってゐる。百二十余年前、開港を迫った当時のアメリカの宗教政策は全く信教自由の建前をとつてゐた。結果としてどうであつたらう。日本の地に蒔かれた福音の種は見事に生育し、よき結実を獲たであらうか。信者の絶対数は増加し、信者は彼らの期待通りに正常な新しい精神を獲たのであらうか。この点の説明として次の挿話が読者に一部を語らう。

上智大学の社会学の鶴見和子教授は興味深い報告をしてゐる。教授の知人のアメリカ人神父は柳田国男先生の学説に関心が深い。先生の説く日本人の懐く祖先信仰についての實際を訊すべく、自分の教会の信者一〇〇名の信仰調査をした。

亡くなった家族は、今何処にをられるか？。90%の人は「身近にゐる」。貴方が死んだら何処に行くのか？。「分らない」。カトリックの信者なのに「天国へ行く」と答へずに、と教授はコメントを付けてゐる。墓詣りは何時しまするか？「お盆と命日」。

神父は先生の説通りであることを知り、「日本でカトリックが普及しなかった原因は、仏教を見習はなかったからだ」との結論を出したそうである（「ばいぶ」28号。昭和五十五年。日本専売公社）。

世界宗教といはれてゐる宗教の分布・布教についてみれば成程複数の地域・複数の民族の間に信仰は弘布されてゐる。然しこの弘布は形式上に止まつてゐて、信仰実態の点では別の事実が現はれる点は看過する訳にはいかない。布教者が宣布するままに、布教の本質が失はれたり傷付くことはなく、そのまま正しく素直に率直に信者側にこれまた正しく受容消化されるならば、当該宗教には世界性・普遍性が内在してゐる、世界宗教の名を冠しても潜越との非難はうけるには及ぶまい。然し実態は左様ではなさそうだ。尤も無文化圏の布教の場合は、沙漠地帯に降雨ある場合に似て、一切はそのまま吸収せられることであらうから、ここでは住民は与へられるままに受取らう。

所謂世界宗教の実態は、原質がそのまま、布教の地域全般の住民の信仰心に受容されるものではない。この点の実認識並びに理解に欠ける点があり、不充分であつたからこそ神社神道者は新来の宗教学の説くままに屈服し威圧され畏縮した恰好になつた。我々の研究不足・眼識力の不徹底さに自ら反省せねばならない。

宗教学が科学と名乗る以上は、学としての宗教学は次第により完全な、より整備された理論体系への展開はあつて然るべきだ。文化科学に自然科学の普遍性を求めるのは、方法上全く謬りにすぎぬ。

故岸本英夫博士は、あるべき宗教学は我国においてこそ求められる旨を語られたことを筆者は直接に耳にしてゐる。理由は日本の文化風土、宗教界の実情、環境から説かれる。日本は生きた多種多様の宗教が併存してゐる。各宗教間には友好的雰囲気があり相互理解の許に併存してゐる事実に着眼して、日本は生きた宗教の博物館であると云へるから、日本においてこそ將に実証的な宗教学は成立する、と語られてゐた。

第三者から觀察すると、同一宗教であるにも不拘、相互に正統を名乗り、相手を異端ときめ付け斥ける、他教の場合には異教とみ、更に悪魔の呪と歯牙にもかけない独善的教條主義国とは違つて、極めて他教に対して寛容である我国は、岸本博士の言を借りるまでもなく、各宗教活動にとつては自由であり天国である。

岸本教授の指摘は説得力に富む。この説は現在でも継承されてゐる（『宗教学辞典』宗教学の項）。

猶、世界宗教という考へは、自然科学流のそれである。宗教は人間に密接しての現象である以上、文化差を身に付けた生きた人間に無関係に生起する自然の出来事を測る原理の如き普遍妥当性を内在した宗教が存在してゐるなどと考へることは、抽象的空論である。理論上でも誤りであり、情緒を納得せしめ得るものでもない。

## 一、吉田神道の教典

吉田神道の教典は極めて数が多い。所謂吉田神道教学は、神祇官奉仕の吉田家累代の人人の手にかかり組織化が積み重ねられたもの。兼道を経て兼俱に至り、教学の筋道の大勢はほぼ決したとみて宜しからう。

兼俱（永享七—永正八年。一四三五—一五二一年）は稀代の人物であった。学才に恵まれ経世の術も心得た祠職である。『唯一神道名法要集』を始め数冊に及ぶ著述を一見して、並々ならぬ学識才能の程が窺はれる。斎場所を創設し、現在の京都吉田神社の一角に大元宮を造営し、ここを神道宣布の拠点として天下の神社界に号令し指導する位置を確保するなど、平均的人物では到底なし得ない仕事を遂げてゐる。一廉以上の人物である。文明十二年（一四八〇年）後土御門天皇に日本書紀と中臣祓とを御進講申し、六年後前八代將軍足利義政のため『神道大意』を進める。日本武尊の東夷遠征関係の記事を日本書紀から抜粋した『倭国軍記』も献じてゐる。好学の將軍義尚にも書紀を講じ、生母日野富子（義政の室）にも親任をうけた人物である。

扱て兼俱の著書の『神道大意』と『唯一神道名法要集』と更に兼直著とみなされてゐる『神道大意』との三部は、『卜部三部大意』として、吉田神道教学中の別格の書として尊重されてゐるといふ。

本稿は、以上の三著を中心として吉田神道教学を究明する。

※ 『神道大意』（吉田叢書第一編）。神道辞典の「神道大意」の項。以上の三部の書物に関する事項は何れも、特別の断り書きのない場合を除いて、吉田叢書本を底本とする。

## 一、『神道大意』のこと

書名神道大意は一般名詞であり固有名詞とはいへない程に、同名を冠する著述は多い。現代流に表示すると、神道概論の書名に相当する。従つて、同名の書述は複数学派の人の手によって書かれてゐる。吉田神道の教学書の中です



んだ学僧か、との異説の紹介もある。※

伊勢の神職家とは外宮の度会一族を指してゐるとみて大過はない。慈遍が度会一族の出身の件を別としても、彼の著述の内容を検討すると、将に外宮神道流と申して宜い。吉田家の学流・学風は殆んどみられない。慈遍は兼好の兄弟であるとの系譜を信用すると、兼好は弘安六年の生、正平五年歿。一二八三—一三五〇年の生存者であるから、慈遍の生歿年は正確さは期し得ぬものの大凡そは判明する。処で兼俱は慈遍に比すると、約一五〇年程の後世の人に当る。そこで兼俱著『唯一神道名法要集』にみえる神道中心の根本枝葉果実説の類似の教説が慈遍の手にかかった『旧事本紀玄義』中に書かれてゐるので、慈遍の年代から算へて一五〇年程後世に活躍した兼俱は、玄義に触目し、この説を通読したことはあり得る。とすると、この点兼俱は慈遍によって開眼されたであらうと推測することは常識上容認せられやう。

※『日本歴史大辞典』慈遍項中に尾崎雅嘉の『群書一覽』を引用して紹介あり。

## 一、慈遍の『神道大意』

扱て慈遍の著書には『豊葦原神風和記』（三巻）と『旧事本紀玄義』（十巻。現在は、一・三・四・五・九巻と序。四五・九巻の三巻は最秘の書として格別に尊重。この旨巻末に記されてゐる）の二部が知られてゐる。前者は別名を『神道大意』といふ。『神道大意要分并両部説』の題名の一本が、京都大学図書館に蔵せられてゐる。※

※『吉田叢書』第一編二頁

豊葦原神風和記にも幾通りかの写本はあるらしい。続々群類（第二）本にはみあたらないものの、吉田業書本によると、神道大意の解説の條に、豊葦原神風和記の巻末には、次の文の記載のある旨が述べられてゐる。本書は興国元（一三四〇）年七月八日稿を起して同年九月六日筆を置く。

本書解説は、「神道ノ大意註（扱ふ意、重要な点を扱んで記すとの意であらう）ヲ取テアラアラ載侍り、委ハ古き記文ニ見ヘタリ」の文がある。又、慈遍は兼顕の子、兼好の兄弟（兄と解すべきか）、旧事本紀玄義には三教根葉果實説の萌芽がみえ、兼俱を初めとする吉田神道教学に何らかの影響を及した、と叙べてゐる。

解説では更に次の点に言及してゐる。慈遍の著と云ふ神道大意は、慈遍は吉田家の傍系の人であるので、吉田家では、本書を吉田家歴代の神道大意中の一書としては取扱つてをらぬ。そこで、この吉田叢書も先例に従つて『吉田叢書』の中にも収載せず、と編者は断つてゐる。

傍系でもあり、疎遠ともなつたので慈遍の神道大意は、吉田家としては家学の神道大意の一本には算えなかつた、との解説は、或は左称でもあらう。更には別の面からの考察も可能である。血縁上、慈遍は、よし吉田家の一員であつても、教学上からみて吉田家は彼を直流者とは認めてゐない点は、教学上の正統者の系譜と判ぜられる「唯受一流血脉」から、明かに慈遍の名は記載漏れであるとの点から確認されるかに思はれる。※

※ この系譜は、吉田業書第二編「唯一神道名法要集」中に収載されてゐる。

「唯受一流血脉」は、天兒屋尊から始まる吉田神道本流の継承者と認めた神及子孫の系譜である。全文の掲載は省略する。関係の個処のみを示す。

兼貞 — 兼茂 — 兼直 — 兼藤 — 兼益 — 兼夏 — 兼豊 — 兼顯 — 兼敦 — 兼富 — 兼名  
兼俱 — 兼致 — 兼満

慈遍の名は見当らない。外されてゐる。仍つて慈遍は吉田神道を正統に受け伝へた一人の吉田家学者であるとして、吉田では容認してはをらぬ、と判ずる理由は以上の事実から尤もと云へる。問題が残るとしたら、この理由の他にも他の理由が秘んではをるまいか、と推察される点である。



慈遍の説いた教学は全面的に乃至は重要な吉田家学と相重なるものはない。概略を説くと、彼の教学は外官教学に極めて近い。旧事本紀玄義の序文の書名は「神道書紀縁起」である。書名旧事本紀玄義から先代旧事本紀を連想させる。両書は内容上は関係はない。但し資料として先代旧事本紀から引用した個处は多い。単なる引用に止まらず、この資料を介して慈遍は己の神道論の展開を試みてさへゐる。

資料として玄義に引用されてゐる書物の書名をみると、外官神道書が多い。神皇実録・神皇系図・倭姫命世記・神祇譜伝図記・宝基本記・御鎮座本紀・太田命伝記（御鎮座伝記）等が挙げられる。そこで一見、慈遍は外官神道教学の系列に位置付けられ、外官神道を継承し祖述した学僧とも諒解される。確にその一面はある。但し仔細且つ精密に学説を検討すると、さうのみ理解することは速断の感がある。三教根葉果実説の一例にみられるやうに、慈遍には主体性がみられる。五部書以下の外官教学書を参考に供しつつも、慈遍にとっては単にそれらは資料としての取扱ひに止まり、その内容を鵜呑みに祖述してはゐない。彼なりに独自の見識で自己なりの教学を組織した痕跡が読みとれる。この点の解明は後日に譲る。

玄義巻第五は、四・九巻と共に最秘の書と扱はれ初学者には披見を許さないとの「神道奥旨」が記されてゐるとの由である。三巻共に問答の形式をとる。巻第五は十章から成り、五章の見出しは「料簡伏難」である。この章に、兼俱の根本枝葉果実説の原型とみられる説がみえる。

是以二尊。受<sup>二</sup>天祖詔<sup>一</sup>。生<sup>二</sup>国及山海及草木等<sup>一</sup>。皆化鳥<sup>レ</sup>神。雖<sup>レ</sup>現<sup>二</sup>生死<sup>一</sup>。神常常恒。故移<sup>二</sup>漢土<sup>一</sup>。是亦<sup>二</sup>以漢字<sup>一</sup>記。神徳彼雖<sup>レ</sup>隔<sup>レ</sup>此。々々<sup>レ</sup>厭<sup>レ</sup>彼。々々<sup>レ</sup>此一徳未<sup>二</sup>得為<sup>一</sup>他。遠近万事無<sup>レ</sup>漏<sup>二</sup>神恵<sup>一</sup>。巨海尚不<sup>レ</sup>厭<sup>二</sup>細流<sup>一</sup>。泰山亦無<sup>レ</sup>議<sup>二</sup>土壤<sup>一</sup>。取<sup>二</sup>百姓業<sup>一</sup>為<sup>二</sup>一人徳<sup>一</sup>。忽使<sup>二</sup>異域<sup>一</sup>悉令<sup>レ</sup>帰<sup>二</sup>本朝<sup>一</sup>。抑和国者三界之根。尋<sup>二</sup>余州一者。此国之末。謂日本則如<sup>二</sup>種子芽<sup>一</sup>。……

記事の大様は次のやうに解ける。二尊、伊弉諾・伊弉冊の二柱神は、天神の詔を承りて国土山川草木等を生み給ふ。何れも神として出現した。神に生死はあるも、神としての反応（神威・神徳の發揮）は常に不易である。そこで神は漢土にまで渡られた（以上の事情についてはシナでは漢字で神道の文字がある。これこそ動かぬ証拠である）。神の威徳は我國に止まらず、遠隔の彼地にまで及ぶ。神は日本・彼国と区別はせず、彼（漢土）も此（日本）も何れも、神徳を一つにしてゐる。兩國は共に神徳に浴してゐる。神は曾て彼国（漢土）を日本と無関係・無縁の国（他）としてつれなく扱った事例はない。遠近何れをとらず国々は何れも漏れることなく神恩を蒙つてゐる。小川なりとも小馬鹿にして拒否せずに流入を認める。大海とはそう云ふものだ。土質を扱ふことなく、土壤である以上積み重ねる。泰山は大きい山だ。益々高い山になる。神は偉大である。自他の国と差別せずに神徳を及ぼすものだ云々と。

偉大なる徳高き君主とは、凡そ国民すべてを被れこれとの差別をせずに己の力働に応じた仕事を充分に果せるやうに国家の体制を整備する如き人徳者である。異国にまで及んだ神徳は自然に自国に環流してくる。そこで、日本は三界の根とみなすことが可能である云々、の三教根葉果実説が展開されてゐる。

三教根葉果実説は、先に示した文言から推して慈遍の初めて陳べた教説とみても大過はなさそうである。とすると、この教説と同意の兼俱説は、慈遍の影響と諒承するも不当ではない。

では慈遍のこの根本枝葉果実説は、彼の独自の学説なのであらうか。或は彼は先人の誰かからの示唆があり觸発されたものなのか。この点の一つの問題として残らう。

現在のところでは何んとも云へない。兼俱はこの説の起りを聖徳太子の推古天皇に対しての密奏とみなした。慈遍は、この辺りのことには一言も解れてはゐない。慈遍の独自の見識を示したのではあるまいか。私見を述べる。

当初、慈遍が神道の漢土への流入という点を裏付けする資料は何か、と考へてみた。素戔鳴尊の韓国へ渡来した記

事が想起される。この記事を根拠として立説したのではあるまいか、と考へてみた。しかし、二行の割註に注目すると、次のやうに推測される。

旧事本紀玄義の文中、「神応常恒」である、そこで神（徳）は漢土に移られた。漢土までも出向かれた。次に「以漢字記神道玄義」の八文字が二行に書かれてゐる。漢字を以て神道と記すの義、と訓める。この八文字は、意識すると、漢土では、漢字によつて神道と記してある理由は以上である、と解けやう。シナの文献中に神道の文字のみえる根拠は、神が彼土に往かれた事実に基づいての事である、と慈遍は註で説明した、ととける。

慈遍は素戔鳴尊の往還の記事も念頭にあつたかも知れぬが、当面の立証の根拠は、漢字に神道の文字がある点に注目し、神道の文字のある以上、神道の実体もシナにある。神道は、抑々日本の信仰であり、日本に生抜きであつて、シナにある筈はない。ない漢土にシナの文字で神道の二字のあるのは、我国から神が出掛けて伝へたものに相違なし、との論法を展開したものと推論される。そこで現在の時点では、慈遍の始めて説く説とみる私見をのべておく。

慈遍の教説の一部であつても、兼俱は之の恩恵をうけた。兼俱をピークとする吉田神道教学の屋台骨を構成する核が、慈遍学説の骨格と相一致せず、共通点がないとならば、吉田家としては、慈遍を吉田神道の血脉上正統継承者の系列から外すことは、よし一族であつたとしても不都合ではない。当然な処置といへる。

慈遍神道教学は外宮神道教学色が著しく濃い。慈遍独自の教学も含まれてゐることは改めて申すまでもない。吉田家は、特に慈遍を蔑ろにしたのではなく、慈遍教学中に吉田神道教学の骨格とは別個のものの著しい点を直視し、理解しての上の処置と解くて、吉田家の慈遍理解への理解・見識に対して改めて敬意を表して然るべきではあるまいか。

一、をはりに

本稿は、更に表題通りに、論旨を展開し、吉田神道の理解・究明に努むべきであるが、種々の事情上、一先づここで筆をおく。次号で責務を果たすことを一言陳べて未完稿の公表のお詫びとする。

— 五八・十一・二五 —